

## ②ワシタカ類

田代地区においては、1997年～1998年にオオタカの繁殖が確認され、その後、2002年～2006年までクマタカの繁殖活動が見られていましたが、2007年以降クマタカの繁殖活動は観察されず、代わって田代を含む周辺域においてオオタカ、ハチクマ、サシバの繁殖が確認されています。また、2018年、2019年、2021年は田代の北側の上相賀地区においてクマタカの繁殖が確認されました。なお、本種は2022年に田代地区内で再び繁殖が確認されましたが、6月段階で中断しました。

田代地区およびその周辺域における猛禽類の繁殖利用はオオタカ→クマタカ→オオタカ・サシバ・ハチクマと推移しています。特に2007年以降はクマタカが営巣しなくなるという「ニッチ<sup>10</sup>の空き」に対応して、ほかのワシタカ類（オオタカ、サシバ、ハチクマ）が一斉に入ってくるように見え（図4.2.6）、種類間の緊密な関係性が推察されます。

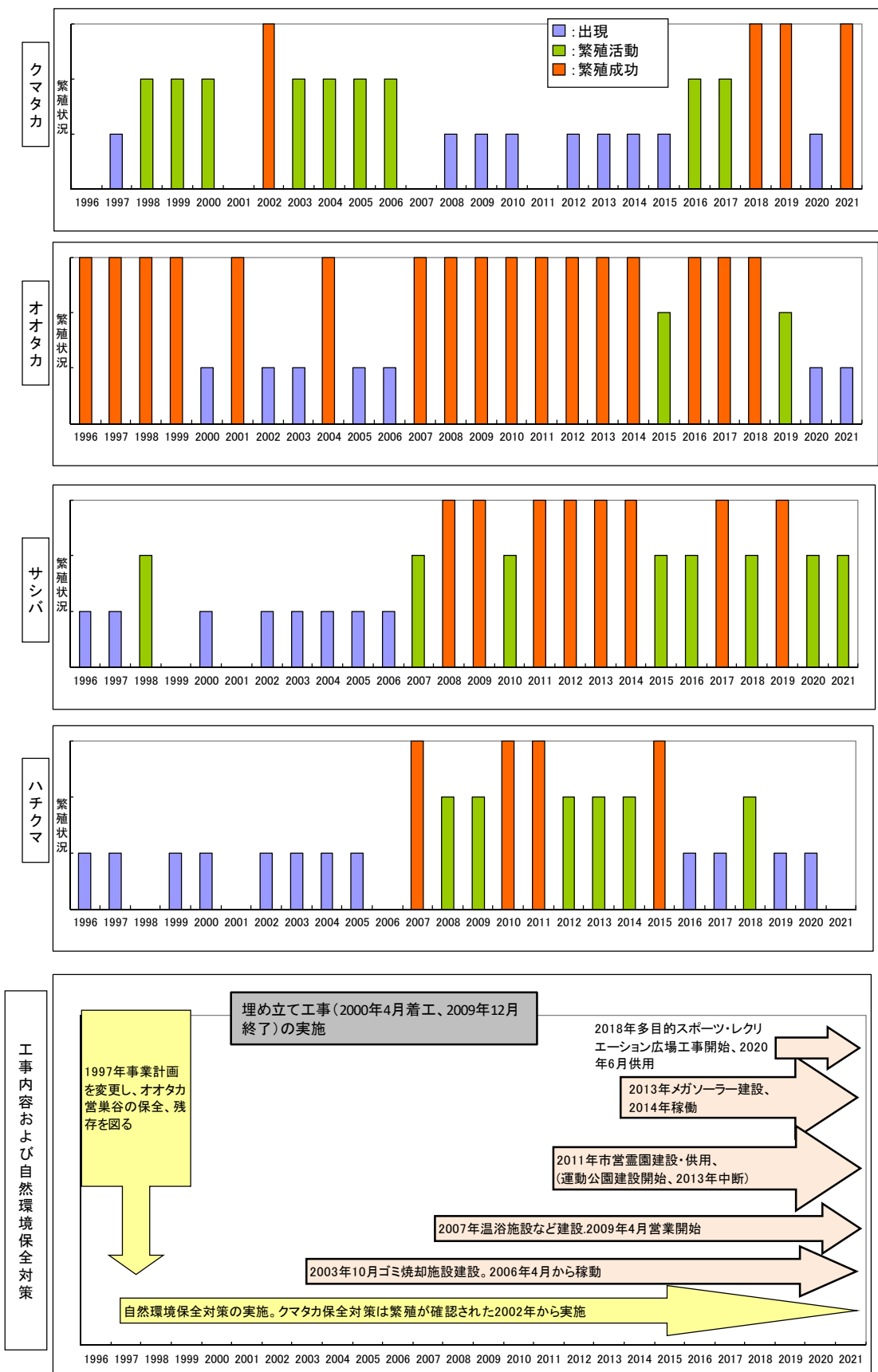
当該地域は、工事開始（2000年）後も、クマタカ、オオタカ、ハイタカ、ツミ、サシバ、ハチクマ、ノスリ、ハヤブサ、ミサゴ、フクロウ、アオバズクなど多様な猛禽類が出現するほか、ミゾゴイ、アカシヨウビン、サンショウクイなどの注目種も確認されており、良好な自然環境が維持されているものと評価できます。特に生態系（食物連鎖）の頂点に位置するワシタカ類の存在は餌となる生物が充実<sup>11</sup>していることを示しており、当該地域の生物相の豊かさを示しているものと考えられます。

クマタカに関しては、地元研究者の2003年時点の情報によると、当該地付近は2002年のクマタカの繁殖成功以前に繁殖例は見られず、本種の主要な営巣地は千葉山以北とされていました。当該地は静岡県下のクマタカ分布域に新たに加わった最外縁部の営巣地と推察されます。非生息地との境界部に位置する当該営巣地はクマタカの分布中心域（南アルプスに連続する後背山地）の営巣地に比べれば、環境変化の影響を受けやすいやや不安定な状況下にあるものと推察されます（図4.2.7～8）。従って、クマタカの保全を考える上でも当該地の環境を維持、保全することは極めて大きな意味があると考えられます。

---

<sup>10</sup> ニッチ：生態的地位。ある種がその個体群を維持することができる環境要因や、食物などの生活資源の範囲を示す。ニッチの用語は、本来、花瓶などを置くために作られた壁のくぼみの意味で使われた。（生態学事典、日本生態学会編、2003、共立出版より）

<sup>11</sup> ワシタカ類の主な餌：クマタカ（ヘビ類、ノウサギ、鳥類など）、オオタカ（ドバト、キジバト、アオバト、スズメなどの鳥類など）、サシバ（トカゲ類、カエル類、昆虫類など）、ハチクマ（ハチの幼虫、カエル類など）



\* : 2001年のクマタカについては、7月1回の調査のみで、本種の出現なし。ただし、2000年8月～12月の本種の出現状況および2002年3月の営巣地発見からすると、2001年も繁殖活動に入っていた可能性が高い。

図 4.2.6 島田市田代地区における猛禽類の繁殖状況と主な工事内容および自然環境保全対策



図 4.2.7 静岡県におけるクマタカの生息分布状況 (2003 年時点)

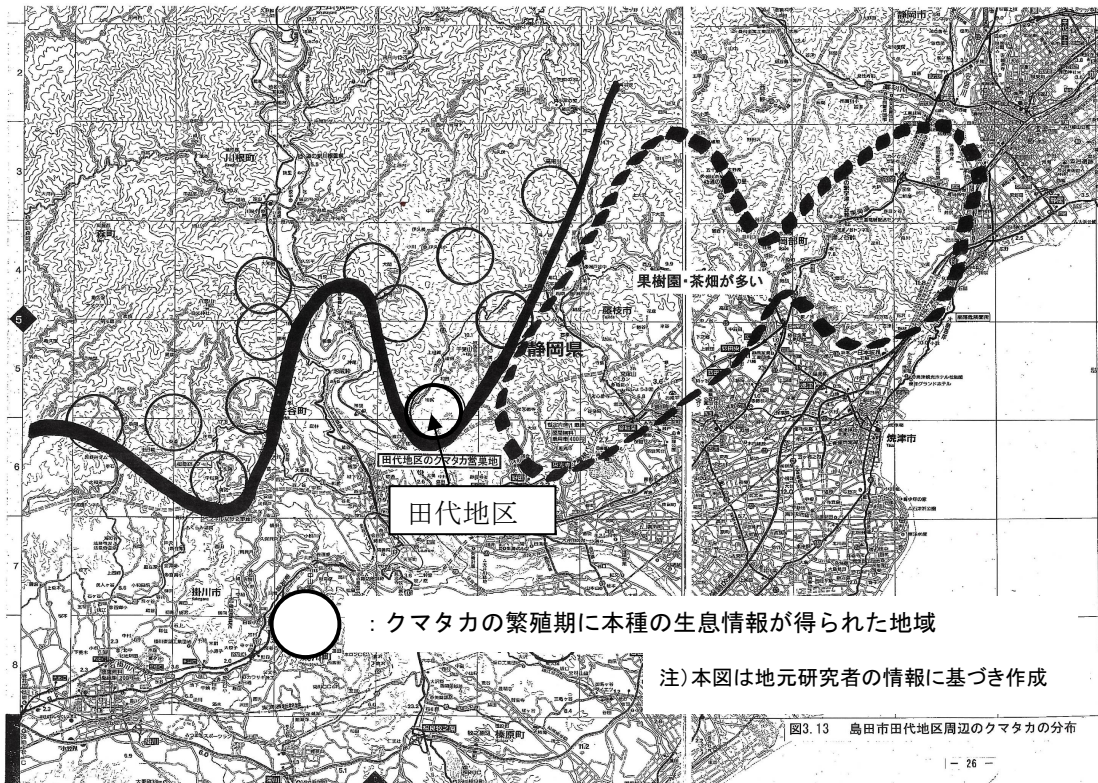


図 4.2.8 島田市田代地区周辺のクマタカの生息分布状況(2003 年時点)